2002年イタリアのベッリーニ劇場に招かれて、ショパンのピアノ協奏曲第1番を演奏した際の賛辞であるが、ショーンバーグ以来定評となった中村紘子の演奏ぶりを伝える一例である。

演奏会に加えてレコーディングも活発で、1968年ソニー・レコードの専属第1号アーティストになって以来出版した40点以上の録音は、クラシックとしてはすべて桁外れの売れ行きを示し、また2003年エイベックス（avex-CLASSICS）と新たな専属契約を結んで制作したCDは、中村紘子の成熟を如実に示して驚きを呼んだ。現在、ベルリンのテルデックス・スタディオのスタッフと組んで、『中村紘子デビュー50周年記念アルバム』を制作中だが期待は大きい。また1982年以来、チャイコフスキー・コンクール、ショパン・コンクールをはじめ数多くの国際コンクールの審査員を歴任し、その体験に基づく最初の著書『チャイコフスキー・コンクール』（中央公論新社刊）は、文明論としても高く評価され第20回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。続く第2作『ピアニストという蛮族がいる』（文藝春秋刊）も文藝春秋読者賞を受けるなど、「文武両道」のスーパーレディぶりは名高い。2003年、＜NHK TV人間講座＞で8回にわたって講演した『国際コンクールの光と影』も、国際ピアノコンクールの歴史と現在を語るだけでなく、21世紀の「豊かな社会」「情報化社会」におけるクラシック音楽の未来を洞察した文明論として好評を博し、この講座をもとにした著書『コンクールでお会いしましょう～名演に飽きた時代の原点～』（中央公論新社刊）も話題作となった。

近年は、広く国内外の若手ピアニストの育成や紹介に努め、浜松国際ピアノコンクール審査委員長、浜松国際ピアノアカデミー音楽監督などをつとめるとともに、ショパン、チャイコフスキー、ロン・ティボー、ヴァン・クライバーン、リーズ、ダブリン、ブゾーニ、シドニー、パロマ・オシア、北京、上海など各国際コンクールの審査も数え切れない。また、「難民を助ける会」や日本赤十字などを通じてのヴォランティア活動にも積極的な役割を果たし、日本における「対人地雷廃絶」運動ではその先頭に立った。アルトゥール・ルービンシュタイン・ゴールドメダル、ポーランド共和国コマンダリー勲章など、ピアニストとしての国際的受賞も多く、その国際的活躍に対して外務大臣表彰を、また長年の放送文化への貢献に対しNHK放送文化賞を受賞。そしてN響の「第2回有馬賞」、エクソンモービル音楽賞などの他にも、「ダイヤモンド・パーソナリティ賞」、「ダイアモンド・レディ賞」など音楽賞以外の受賞も多い。

2007年秋には、27年ぶりに再結成した海野義雄、堤剛との「ゴールデントリオ」の全国公演が話題をよんだが、2008年も、東京交響楽団との連続30回目を迎えるニューイヤーコンサートに始まり、プラハ交響楽団、ドレスデン・フィルとの共演、そして全国各地でのリサイタルなど意欲的な活動が予定されている。2009年秋にはデビュー50周年を迎える。

公式ホームページ
http://www.hiroko-nakamura.jp/

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie